

捕虜のなかには、カメラをもってきた者もあり、松山の景色や人びとの生活を撮影しては捕虜生活の楽しみとしていたようである。なお、本資料に収められている写真の撮影者は不明である。

さて、日露戦争は本格的な戦時国際法に則っておこなわれた最初の戦争といわれる。一八九九年、オランダのハーグで開かれた第一回万国平和会議において、「陸戦ノ法規慣例ニ関スル条約（ハーグ条約）」が採択され、捕虜の取扱について規定された。これに基づき、日本では「俘虜取扱規則（一九〇四年二月十四日陸達第二十二号）」が定められ、国を挙げて捕虜の優遇措置をとった。日本は、国際法の遵守によって近代国家の一員たる姿勢を国際社会にアピールしようとしたのである。松

山においても、日本の品位を落とすような行動をとらぬようにとの訓令が県当局から各方面へ発せられていた。松山市民は、次々にやってくる異国人たちに驚きつつも興味津々であり、捕虜たちが滞在した約二年の間、彼らを手厚くもてなした。

松山は、日本で最初に収容所が開設されたということもあり、ロシア兵の間でも日本の捕虜収容所といえば「マツヤマ」と知られていた。近年発見及び紹介されたロジェストウエンスキー提督の手紙のなかにも「マツヤマ」の名が登場し、日本海通過を目前に控え、マツヤマ経由ではなく、無事帰国できるようにと記されている。日本海海戦の結果、提督は捕虜となり、佐世保海軍病院に収容された。松山へも捕虜となったバルチック

艦隊の乗組員たちが送られ、本資料にも彼らの写真二枚が収められている。

本資料は、現在「企画ギャラリー」にて展示中である。このほか、当館の捕虜関係資料にはトランクや銃剣、アイコン、スプーンとフォーク、絵葉書などがある。松山市御幸のロシア人墓地は、今なお地元の中学生や市民によって定期的に清掃され、大切に守られている。当館においても、松山におけるロシア兵捕虜の歴史を伝えるものとして、資料の収集・展示に今後も努めてゆきたい。



バルチック艦隊の捕虜が大阪へ転送のため高浜を出航する様子。

## 館蔵資料紹介 「ロシア兵捕虜写真帖」 徳永佳世 坂の上の雲ミュージアム学芸員

一九〇四年三月十八日、三津浜港に日露戦争におけるロシア兵捕虜の第一陣が上陸した。日本初の捕虜収容所が開設された松山市内には、その後、寺院や公共施設など計二十一の建物が収容施設にあてられ、最大で四千名の捕虜が収容されることとなる。

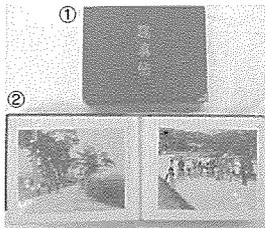
「ロシア兵捕虜写真帖」二冊は、収容所で捕虜たちの診療に関わった日本赤十字社の矢野医師が所有

していたものと伝わっており、捕虜関係写真のほか松山の風景、風俗写真が合計七十三枚収められている。

捕虜関係写真としては、三津浜港や高浜港から上陸、また他の収容所へ転送のため出発する捕虜たち、伊予鉄道高濱駅や古町駅での光景、道後公園での自転車競走、自由散歩の様子、城北練兵場に設けられたバラック（仮設病室）全

景、義足を手にする負傷兵などがある。収容所開設以降、県内外から数々の慰問品が届けられ、昭憲皇后からは義手や義足が贈られたという。また、ロシア皇帝と皇后からも書籍やタバコ、お金などが贈呈された。

松山の風景、風俗写真としては、松山城や高浜港、市内の学校、名所が写されている。なかでも道後の写真は数多く、十七種ほどある。



写真帖の規格  
①縦130×横187×高さ25mm  
②縦138×横195×高さ50mm